

金の輪

小川未明

青空文庫

一

太郎は長い間、病気で臥していましたが、ようやく床から離れて出られるようになりました。けれどまだ三月の末で、朝と晩には寒いことがありました。

だから、日の当たっているときには、外へ出てさしつかえなかったけれど、晩方になると早く家へ入るように、お母さんからいいきかされていました。

まだ、桜の花も、桃の花も咲くには早うございましたけれど、梅だけが垣根のきわに咲いていました。そして、雪もたいてい消えてしまつて、ただ大きな寺の裏や、圃のすみのところなどに、幾分か消えずに残っているくらいのものでありました。

太郎は、外に出ましたけれど、往來にはちようど、だれも友だちが遊んでいませんでした。みんな天氣がよいので、遠くの方まで遊びにいったものとみえます。もし、この近所であつたら、自分もいつてみようと思つて、耳を澄ましてみましたけれど、それらしい声などは聞こえてこなかったのであります。

ひとりしよんぼりとして、太郎は家の前に立つていましたが、圃には去年取り残した野

菜^{さい}などが、新^{あた}しく緑^{みどり}色^{いろ}の芽^めをふきましたので、それを見^みながら細^ほい道^{みち}を歩^{ある}いていまし
た。

すると、よい金^{きん}の輪^わの触^ふれ合^あう音^{おと}がして、ちやうど鈴^{すず}を鳴^ならすように聞^きこえてきました。
かなたを見^みますと、往^{おう}来^{らい}の上^{うへ}を一人^{ひとり}の少^{しょう}年^{ねん}が、輪^わをまわしながら走^{はし}つてきました。
そして、その輪^わは金^{きん}色^{いろ}に光^{ひか}っていました。太郎^{たろう}は目^めをみはりました。かつてこんな^{うつく}に美^{うつく}
しく光^{ひか}る輪^わを見^みなかつたからであります。しかも、少^{しょう}年^{ねん}のまわしてくる金^{きん}の輪^わは二つ
で、それがたがい^ふに触^あれ合^あつて、よい音^ね色^{いろ}をたてるのであります。太郎^{たろう}はかつてこんな^{おも}に
手^て際^{ぎわ}よく輪^わをまわす少^{しょう}年^{ねん}を見^みたことがありません。いったいだれだろうと思^{おも}つて、か
なたの往^{おう}来^{らい}を走^{はし}つてゆく少^{しょう}年^{ねん}の顔^{かお}をながめました。まったく見^み覚え^{おぼえ}のない少^{しょう}年^{ねん}
でありました。

この知^しらぬ少^{しょう}年^{ねん}は、その往^{おう}来^{らい}を過^すぎるときに、ちよつと太郎^{たろう}の方^{ほう}を向^むいて微^び笑^{しょう}
しました。ちやうど知^しつた友^{とも}だちに向^むかつてするように、懐^{なつ}かしげに見^みえました。

輪をまわしてゆく少年の姿は、やがて白い路の方に消えてしまいました。けれど、太郎はいつまでも立つて、その行方を見守っていました。

太郎は、「だれだろう。」と、その少年のことを考えました。いつこの村へ越してきたのだろう？ それとも遠い町の方から、遊びにきたのだろうかと思ひました。

明くる日の午後、太郎はまた圃の中に出てみました。すると、ちょうど昨日と同じ時刻に、輪の鳴る音が聞こえてきました。太郎はあなたの往來を見ますと、少年が二つの輪をまわして、走ってきました。その輪は金色に輝いて見えました。少年はその往來を過ぎるときに、こちらを向いて、昨日よりもいっそう懐かしげに、微笑んだのであります。そして、なにかいたげなようすをして、ちよつとくびをかしげましたが、ついそのまゝいつてしまいました。

太郎は、圃の中に立つて、しょんぼりとして、少年の行方を見送りました。いつしかその姿は、白い路のあなたに消えてしまったのです。けれど、いつまでもその少年の白い顔と、微笑とが太郎の目に残っていて、取れませんでした。

「いつたい、だれだろう。」と、太郎は不思議に思えてなりませんでした。いままで一度も見ることがない少年だけれど、なんとなくいちばん親しい友だちのような気がして

ならなかったのです。

明日あしたばかりは、ものをいってお友だちになろうと、いろいろ空想くうそうを描えがきました。やがて、西にしの空そらが赤あかくなって、日暮ひぐれ方がたになりましたから、太郎たろうは家うちの中なかに入はいりました。

その晩ばん、太郎たろうは母親ははおやに向むかって、二日ふつかも同じ時刻おなじじこくに、金きんの輪わをまわして走はしっている少年しょうねんのこことを語かたりました。母親ははおやは信しんじませんでした。

太郎たろうは、少年しょうねんと友だちになつて、自分じぶんは少年しょうねんから金きんの輪わを一つ分けてもらつて、往來おうらいの上うへを二人ふたりでどこまでも走はしつてゆく夢ゆめを見みました。そして、いつしか二人ふたりは、赤あかい夕焼ゆうやけ空ぞらの中なかに入はいつてしまつた夢ゆめを見みました。

明あくる日ひから、太郎たろうはまた熱ねつが出でました。そして、二、三日にちめに七なつで亡なくなりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「読売新聞」

1919（大正8）年1月21～23日

※表題は底本では、「金《きん》の輪《わ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金の輪

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>